

ヘブル人への手紙2章14-18節 「血肉を持たれた方」

1A 死の恐怖からの解放 14-16

1B 子たち 14

2B 死の力 14

3B 悪魔の滅ぼし 14

4B 恐怖の奴隷 15

5B アブラハムの子孫 16

2A 忠実な大祭司 17-18

1B 憐れみ深さ 17

2B すべての点での兄弟 17

3B 民の罪の宥め 17

4B 自ら受けた試み 18

本文

ヘブル人への手紙2章を開いてください。前回、2章の前半、13節まで学びました。こんなにもすばらしい救いがテーマです。そしてイエス様が人となられて、人とならえたからこそ、人々を救うことができるという話が後半になります。

みなさんに質問です。ある人がテロリストのグループに人質になって、拘束されています。それで、そこから脱獄できるように手伝いたいと思います。みなさんならどうするでしょうか？一つは、特殊精鋭部隊のような動きです。武器を使って、捕まえている人たちと銃撃戦をして、救出する方法です。または、身代金を払うとかして交渉するのも考えられます。もう一つあります。身分をごまかして、地元民として潜入することです。自分自身がそこにいる人々と全く同じようになり、その人質のところまではいって、そして救出することです。

イエス様の行われた救いは、最後の救出と似ていました。ご自身が囚われている私たちと全く同じようになられました。そして、ご自身が死ぬことによって、その犠牲によって、私たちに救いくださいました。それが、2章のテーマです。神の救いが、神ご自身が人となられることによって、その死によって、囚われている人々を救われるのです。

1A 死の恐怖からの解放 14-16

¹⁴ そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、

1B 子たち 14

「子たち」と言っていますが、これは 13 節にある言葉から来ています。「見よ。わたしと、神がわたしに下さった子たち」とあります。イエス様を信じて、この方に連なる者たちを、ご自身の子たちと呼んでおられます。つまり、私たちのことです。私たちと同じように、血肉を持つことによって、救いを成し遂げられました。

すでに、神はアダムが罪を犯したときから、人の子によって、悪魔のしわざを打ち砕き、救われることを約束しておられました。アダムが罪を犯した後に、エバを惑わした蛇に対してこう言われました。「創 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」悪魔の頭を打つのは、女の子孫だということです。女から生まれた者を通して、その肉体を持っている者が、悪魔の脳天を砕くことによって、罪に捕らわれている人々を解放します。

人というのは、生まれた時から罪と弱さを抱えていることを、「女から生まれた者」という表現を聖書は使います。重い皮膚病でもだえ苦しんでいるヨブが、こう言いました。「14:1 女から生まれた人間は、その齢が短く、心乱されることで満ちています。」人の肉体は滅びるということです。「15:14 どういう人が清くあり得るのか。女から生まれた者で、だれが正しくあり得るのか。」人は、まったく清くなることはあり得ないということです。ダビデは、バテ・シェバと姦淫の罪を犯した後で、罪の告白をしました。「詩 51:5 ご覧ください。私は咎ある者として生まれ罪ある者として母は私を身ごもりました。」このように、肉体を宿していることは、そこにある弱さ、また罪を抱いているということを想起させます。そして、その体は朽ちます。「創世 3:19 あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」と主はアダムに言われました。

イエス様は、その弱さを身にまとってくださいました。イエス様は、私たちと全く同じように、疲れしました。ヨハネ 4 章で、「旅の疲れから、その井戸の傍らに、ただ座っておられた。(6 節)」とあります。私たちと全く同じ肉体をもって、十字架につけられたのです。私たちは、イエス様は神だから、肉体において私たちと何か違うのではないか？特別な力があって、十字架でも痛みを耐えることができたのではないか？と思われるかもしれませんが、いや、まったく同じ体だったのです。

2B 死の力 14

そして、「死の力を持つ者、すなわち、悪魔」と言っています。悪魔は人殺しです。イエス様が言われました。「悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。(ヨハネ 8:44)」悪魔は、アダムに罪を犯すように仕向けて、その罪の中で死ぬようにさせました。また、アダムから出たカインは、信仰によっていけにえを献げた弟アベルを殺しました。霊的にも、肉体においても、人が死んで、死んだ後も神から引き離されて、永遠の死を受けるように全情熱を傾けています。

「死の力を持つ」とあります。今、悪魔が世界を支配していることがわかります。人が罪を犯して、そしてすべての人が死んでいるからです。「ロマ 5:12 ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同様に…」罪と死が世界に広がっているのですが、その背後に悪魔がおり支配しているのです。「Iヨハ 5:19 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」

3B 悪魔の滅ぼし 14

しかし、主イエスは、ご自分のからだに、死をもたらしした罪を背負われることによって、悪魔の持つ、死の力を打ち砕かれたのです。先ほどの女の子孫の預言を読み返しましょう。「彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」とあります。女の子孫のかかとを打つとあります。しかし、彼はかしらを打っています。これは、蛇のあたまを踏みつけて、蛇がそのかかとを噛んでいる姿です。イエス様が十字架につけられた時の姿をよく表しておられます。主が、十字架につけられるのは、ユダヤ人の指導者たちの妬みと殺意によるものです。その背後には、確実に闇の力が働いていました。ご自身を捕えに来た者たちに対して、「しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。(ルカ 22:53)」とされています。

しかし、主が十字架刑に処せられるまでの姿を見ますと、主導しているのは、実は主ご自身なのです。捕えられる人々でさえ、イエス様が「わたしだ」と言われただけで、倒れてしまっています。また指導者たちは、過越の祭りは避けたいと思っていたのに、結局過越の祭りでした。彼らがイエス様を裁判にかけたときに、主はあえて、ご自身が雲に乗って天から来られることを告げられ、明確に、ご自身が神の御子キリストであることを大祭司の前で告白されました。それで死刑と定められたのです。総督ピラトの前では、弁明されませんでした。このように、イエス様が敢えて働きかけなければ、十字架刑はあまりにも容易に避けられたのです。主は言われていました、「ヨハ 10:18 だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです。」主ご自身が、この道を主導しておられたのです。

そして主イエスが、ここで何も罪を犯されていないということが大事です。それには、二つの効果があります。一つは、ほかの人の身代わりになれるということです。もし、罪を犯しているのであれば、自分の罪のために死ななければいけません。けれども、罪を犯しておられなかったからこそ、私たちの罪をご自身に負わせ、その罪を取り除くことができたのです。

そしてもう一つの大事な効果があります。主は罪を犯されませんでした、再度まで正しい方でした。それなのに、死刑を受けたのです。しかし、その義は報われなくて終わることはありません。その義が正しいことが晴らされるように、神はこの方を死者の中からよみがえらせたのです。正し

い方が滅びを見せることは、神はなさらないのです。ペテロが説教しました。「使 2:24 しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」

そして、この義を私たちにくださるのです。主は私たちをその死によって、神の前での罪の赦しを与えてくださり、そのよみがえりによって、その義を私たちにくださったのです。「ロマ 4:25 主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」ゆえに、罪によって死に、死後に裁きを受けるという滅びから、私たちは免れることができたのです。ここで、悪魔を「滅ぼ」すと言っていますが、それは悪魔が存在しなくなるということではなく、その力を抜き取ってしまうということです。無力化することです。

ですから、今は、私たちは悪魔の力を恐れることはありません。キリストのうちにいる限り、悪い者は私たちに触れることはできません。「Iヨハ 4:4 子どもたち。あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。」私たちは、罪に定められることがなくなったし、それから、死んでもまたよみがえる確証が与えられました。死の力を持つ悪魔の脳天が打ち砕かれたからです！

4B 恐怖の奴隷 15

¹⁵ 死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。

私たちは、すべての人がいつか死ぬというのは、当然の定めとして受け入れています。けれども、ラザロのよみがえりの時の話を思い出してください。ラザロを愛していた人々が泣いていました。死は当たり前だと思っても、それでも、なぜ死というものがあるのか？と苦しみもだえるのです。そういった意味で、人々はみな死を恐れているのです。

それだけではありません。人が死を考える時に、自分の犯した罪を思い出します。エリヤが、やもめのところに行ったのを思い出してください。彼女は、自分の息子と共に最後に残された粉と油でパンを食べて、それで死のうと思っていました。けれども、エリヤは主から言われて、私のためにパンを作りなさいと言いました。彼女がそうすると、かめの粉は尽きず、壺の油もなくなりませんでした。ところが、男の子が病気になって死にました。その時に彼女はエリヤに行ったのです。「I列王 17:18 彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはいったい私に何をしようとされるのですか。あなたは私の咎を思い起こさせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。」」彼女は、息子の死を見て、自分の咎を思い起こしていたのです。

死というものは、罪が入ってきたことによって世界に入ってきました。ですから、死ぬことが必ずしも、何かの特定の罪ではないにしても、自分の罪を思い出すのです。罪からくる報酬は死だからで

す(ロマ6:23)。私たちは、そうした死の恐怖によって、一生涯奴隷につながれていると言えます。

イエス様は、その恐怖から解放してくださいました。私たちを罪をご自身の肉体から流れ出た血潮によって、取り除いてくださいました。そして、死んでもよみがえるという希望をくださいました。そこにある神の愛によって、私たちは恐怖に陥れる奴隷の霊から解放されているのです。「ロマ8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」神の愛は、恐れを締め出すのです。「Iヨハ4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」

5B アブラハムの子孫 16

¹⁶ 当然ながら、イエスは御使いたちを助け出すのではなく、アブラハムの子孫を助け出してくださるのです。

1章で、御使いは、神に仕える霊、また救いを受け継ぐ者たちに仕える霊であることを学びました。イエスは、ご自身が誘惑を受けられた時や、ゲッセマネの園で祈られた時には、御使いが仕えていましたが、御使いを助けることは一つもありません。しかし、人に対しては助け出してくださいるのです。ここにある、「アブラハムの子孫」とは、神の祝福の約束が与えられている人々です。どんなに小さき者であっても、アブラハムの子孫であるからという理由だけで、その契約があるから、その人は助けられる価値があるのです。

ルカによる福音書には、18年間も病の霊につかれて、腰が曲がって全く伸ばすことができない女の人でしたが、イエス様は病からの解放を宣言されました。安息日だったので、会堂司が憤ってなじりましたが、イエス様は、逆にたしなめたのです。「13:16 この人はアブラハムの娘です。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日に、この束縛を解いてやるべきではありませんか。」

そして、有名なザアカイがいます。取税人であり、人々に嫌われていました。ところが、イエス様は、彼の家に入ります。人々は、「あの人は罪人のところに行って客となった」と文句を言いました。しかし、ザアカイは自分が行ってきたことを悔い改めて、財産を貧しい人に与える、だまし取った物は四倍にして返すと言いました。それでイエス様が言われます。「19:9 今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」どんなに弱き者、罪深い者でも、主の目には高価で尊いのです。

みなさんが、どんなに罪の問題があろうとも、そして肉体の弱さから抱えている恐れがあろうとも、イエス様にとっては、高価で尊いのです。神にある憐れみは、アブラハムの子孫であるユダヤ人

だけでなく、キリストを信じる異邦人にも及びます。そして、死の恐怖から解放して下さるのです。

2A 忠実な大祭司 17-18

¹⁷したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで民の罪の宥めがなされたのです。

パウロは、本題に入っていきます。1章3節で、著者は「御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」と書きました。ここの、「罪のきよめを成し遂げ」というのが、祭司が行うことです。もっと具体的に言えば、大祭司が年に一度、至聖所に入り、雄羊のいけにえの血を携えて、罪の宥め、あるいは清めを行うことです。イエス様ご自身が、父なる神の前に、ご自身の血を携えていき、それで罪の清めが成し遂げられたというのが、これからの話の流れになります。

祭司とは、このように民に代わって主の前に出ていき、執り成す存在です。そして主の前に行き、そこで恵みを受けたら、今度は民の前に出て恵みを分かち合う存在です。イエス様は、父なる神を人々に示し、かつ人々の罪の宥めを行われて、それで父なる神の前に出ていく大祭司です。

1B 憐れみ深さ 17

そこで、イエス様が「あわれみ深い、忠実な大祭司」ということです。忠実であるというのは、父なる神に対して忠実ということです。これは次回、3章で学びます。あわれみ深い、ということに注目しましょう。イエス様は、ご自身が肉体を取っておられ、人の痛みや苦しみを知らない方ではありませんでした。何度となく、深くあわれまれたという言葉が福音書に出てきます。「マタ 9:36 また、群衆を見て深くあわれまれた。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。」イエス様は、私たちの弱さを知らないでいることは決してありません。

2B すべての点での兄弟 17

そこで、「イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。」と著者は言っています。一部の点で、人となられたのではありません。イエス様は、50%人になったのではありません。この方は100%神であり、100%人なのです。

3B 民の罪の宥め 17

そして、「民の罪の宥め」であります。これは罪の赦しといってもいいですし、罪の清めと言ってもいいでしょう。宥めというと、それは正しい裁きが満たされるという意味合いがあると思います。神の正しい怒りが満たされるということです。それは、感情的な怒りではなく、裁判官が刑を下すような、正義からくる怒りです。それを、イエス様が十字架の上で満たされた、ということです。これが、罪

の宥めの意味です。赦しであれば、それは罪の責めを持ち出さないことです。また、清めは罪によって汚れたものが、清められるということになります。

4B 自ら受けた試み 18

¹⁸ イエスは、自ら試みを受けて苦しまれたからこそ、試みられている者たちを助けることができるのです。

著者は、今、ユダヤ人の信者たちが苦しみ、試みを受けていることを知っています。迫害され、信仰が試されています。そこで励ましています。イエス様がその悩みを知っておられるよ、ということです。主ご自身が、試みを受けることを何よりも知っておられました。肉体の弱さがある中で、四十日間、ユダの荒野で飲まず食わずでした。その後、悪魔が表れて、石をパンに変えること。神殿の頂から落ちること、そして世界の栄華と引き換えに悪魔を拝むことという誘惑です。それらをイエス様はすべて退けられました。

試みを受けることは、罪を犯しているのではありません。誘惑に屈する時に罪になります。イエス様はこのことをよく知っておられます。ご自身が、誘惑を受けていましたが、そこで罪を犯されなかったからです。その恵みを、この方が人となられたことによって、私たちも受け取ることができます。「I コリ 10:13 あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」

神にはできないことで、人にはできることがあります。これは矛盾した言い方ですね。それは、人にしかない弱さを知ることです。人にならなければ、その弱さを知ることはできません。弱さは、それを自分自身が知ることによって、初めて知ることができます。苦しみについても、パウロが第二コリントで、苦しみを受けたから神の慰めを知り、だからほかに苦しんでいる人を慰めることができるということを話しました(1:3-6)。だからこそ、イエス様は兄弟と同じようになられたのです。それで、試みを受けている人を、今度はご自身が助けることができるようになるためなのです。

私たちは試みを受けると、キリスト者としては二級市民なのではないか？と感じます。きちんとしたクリスチャンではないと。けれども、そんなことであればイエス様は試みを受けられませんでした。二級市民ではないのです、れっきとした、神に愛されたキリスト者です。